

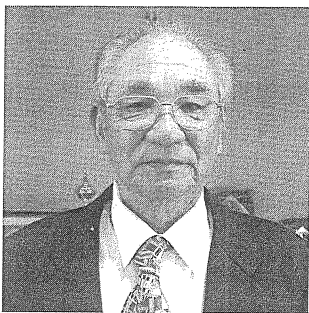
剣道あまくさ

第 3 号

発行所 天草市東町3
天草市総合武道館
天草剣道連盟

現在は剣道を稽古したいときは殆どいつでも、またどこでも出来る状況にある。しかし今の若い剣道愛好家には想像もつかないだろうが、剣道は戦後禁止されていたのである。当時の剣道界の事情と剣道禁止の背景を知り、当時の先達の苦労に思いを遣ることは、今の恵まれた私達にとって改めて初心に返り、稽古が出来る幸せを再確認出来るだろう。今回も前会長の浦田政八先生に寄稿して頂いた。

終戦から剣道発足まで 浦田 政八



昭和二十年（一九四五）八月十五日、終戦を迎えた日本はその直後アメリカ軍の進駐を受けることとなった。この駐留軍は当然のことのように日本の武道教育を公の場において全面的に禁止した。武道関係者たちは八方手を尽くした結果、武器を必要としない柔道が比較的短期日に再開の許可を得たのに対し、軍国主義的イメージ濃厚な剣道は皆目といっていいほど再開の目途が立たなかった。

「どうすれば許可が得られるのか？」日本剣道界の懸命の説得と問いかけにGHQ（連合国総司令部）は、「剣道が軍国主義と直接の因果関係をもたぬことを実証せよ。」と回答してきた。

どのようにして実証すればよいのか。関係者間では喧々諤々、幾多の方法が論じられたが、つまるところGHQ側の武道もしくは格闘術の代表的な遣い手を日本代表の武道家が倒してみせるのが近道ということになった。無論、単なる勝利に終わったのでは剣道のもつ崇高な精神は理解されまい。要は勝ち方であった。相手に真剣を持たせ、敗戦国の日本側は木刀で相対するほどのハンディを示してなおも圧倒的勝利をおさめることができればGHQは日本武道が有する高邁な理想に耳を傾けてくれるのに違いなかった。

だが日本側が敗れば取り返しのつかないことになることは必定で、剣道は未永く禁止の憂き目を見るばかりか、アメリカの格闘技が日本に輸入され、それを押しつけられることにもなりかねなかった。

「やるからには必勝だ。日本は負けるわけにはいかぬ。」剣道界の重鎮で国政にも参与していた小野派一刀流の宗家、笹森順造は慎重に代表選手の人選を開始した。その最中にGHQから日本側の提案に同意する旨が伝えられた。また先方の代表選手は海兵隊所属の銃剣術教官で歴戦の勇者であり、レスリングについてもアメリカ屈指の実力者であることが知らされた。「剣だけではないかん。組み討ちにも優れている者がのぞましい。」候補者は、日本広しといえどたった一人しかい

なかった。日本剣道界の興亡を託せるほどの遣い手であるが、この人物は実に天衣無縫で、強さは無類であったが、極めつけの横紙破り。これまでも剣道界の慣習に反し抗い、大胆不敵にも武道界全体に挑戦してきた異端者であった。「鹿島神流正統十八代師範国井善弥」人々はさも悔しそうにこの人物の名を口にされた。なるうことなら代表など

に選びたくはなかったが「必勝」の二文字を念頭におけばどうしてもこの武道家でなければならなかった。なにしろ桁外れに強い。日本史上どれほどの剣の名人、達人と謳われた人物でも生涯にわたって無敗という武道家は稀であった。負けるときは負けるというのが「剣」の定めといつてよい。ところが決して大仰にいうのではなく、生涯無敗を誇った武道家が日本にはいなかった。昭和四十一年（一九六六）八月十七日に他界するまでこの世に存在していたのである。それが国井善弥である。いかに強かったか幾つかのエピソードは伝説化されているが、この人の不敗ぶりはすでに存命中から全国に流布されていた。

「国井さん、相手は真剣を着装しておる。それをあなたは木刀で迎えうたねばならぬ。しかも決して相手を傷つけてはなりません。どうであらう、この役目をお願いできようか。」笹森順造は深刻な面持ちで国井を口説いた。国井はニヤリと笑うと即座に首を縦に振った。当然である。この先生は「他流試合勝手たるべきこと」と自身の道場に大書し、終生、他流から挑まれて、ただ一度として拒んだことのないことを誇りとしていた。「断る？なんでそんなもつたないことをする。」舌なめずりするのが国井善弥だった。

二人は対峙していた。相手は正真の銃剣を右半身に備えている。国井が木刀を青眼に構えてからいかほど刻が経つたものか、二人は微動だにしない。

「大丈夫であろうか。」試合の推移を見守る文部省官僚の中には耐え切れなくなったものか、あからさまに口にする者もあった。このとき国井善弥は五十路を二つばかり超えていた。相手のアメリカ人将校は未だ三十代である。長身でがっしりとした体格の将校は、自分からは決して仕掛けようとはしなかった。善弥の構える青眼の切っ先が、スーツと右足の脇に滑る。相手は全体として動じない。次の瞬間、善弥は脇にしていた木刀をいきなり振りかぶると相手の面を打ちにいった。それに応じて銃剣の先で木刀を横に払う。教官は払ったままの銃の尻をそばして左面を強襲した。善弥はわずかに歩

幅をつめ四肢に漲らせていた強靱なバネを一気に放出し、躍り込んできた敵の銃剣へ木刀を小さく回転させ迎撃し、次の瞬間には相手の喉元にびたりと木刀を擬していた。すべては瞬間の出来事であり笹森をはじめとして立ち合った人々には国井がいかにして神速の刀法を駆使して勝ちを制したのか、ついにわからなかった。

「私の負けです。」押さえつけられた当の銃剣術教官も秘技についてはやはりわからなかったようだ。「日本の武道は深遠であります。常に人を殺傷するだけの低次元のものでは決してありません。」将校の証言もあって、間もなく日本剣道は復活の糸口をつかんだのである。

かくして昭和二十七年（一九五二）十月十四日には全国の剣道愛好家の希望が結束されて全日本剣道連盟が発足する。一時期は全日本撓競技連盟が並立する形になっていたが同二九年に両連盟は合併し、日本剣道は統一されることになった。高校、大学では昭和二十七年七月剣道が認められる。昭和三二年には中学校以上で剣道が正式体育として実施されるようになる。

参考資料「現代武道全集」